

京機短信300号達成！

— 前編集者 久保愛三さんへの 感謝特集号 —



「京機短信」1/8世紀300号の歩み

藤川卓爾 (S42/1967卒 京機会元会長)

「京機短信」は平成16年(2004年)10月5日に第1号が発行されてから12年半、4月20日には第300号が発行されました。創始者でありこの1/8世紀に及ぶ長期間ずっと世話人を続けてこられた京機会元会長の久保愛三さん(S41)のご努力に感謝します。

平成19年(2007年)3月20日の第59号で「3月末で定年退職しますが京機短信発行の仕事は、今しばし、久保がお手伝いをする事になりそうです。」と書いてありましたが、「今しばし」が実に10年になったわけです。

もともと京機会会員の連絡手段として「京機会ニュース」が年2回発行されてきました。インターネットの世の中になって京機会からの諸連絡が会員にメールで届くようになりました。また、京機会ホームページも開設されました。

京機会のホームページで「京機短信」のバックナンバーが見られますのでこの1/8世紀300号の歩みを振り返ってみました。

創刊号には「日本の機械産業の発展の中心に京大機械系学科を存在させ、日本の豊かさと平安に貢献する義務が我々にはあります。大学企業双方において、誰が何をやっているかをお互いに知り、相互理解、研究・教育を活性化させ、その上に立って機械系教室0Bと大学とが連携し相互の発展を目指す必要があります。」

と「創刊趣旨」が書かれています。

私はもちろんこの趣旨に賛成ですが、久保さんが第109号で「星の王子様」から引用して、「利や効率のみにしか価値を見いだせないのは、本当に大切なものに気を付けさせないんだ。長い間には大きな物を失ってしまうよ。「人の絆」が出来るためには、一見無駄と見えるような、一緒に遊ぶ時間が必要なんだ。」と書いておられるのが好きです。京機会は「一緒に遊ぶため」の「場」であり、「京機短信」はその「メディア」の役割を果たしていると思います。

創刊号には、「創刊趣旨」の他、学生フォーミュラの記事が掲載されています。この年、KART (Kyoto Academic Racing Team) は初出場で完走し総合20位に入りました。リーダーの高橋祐城さん (H17) やアドバイザーの横小路泰義さん (S59) の声や次年度への決意が書かれています。その他、講演会、同窓会の案内があり、最後に会員論文抄録として本田博さん (S47) の英文論文が2件紹介されています。本田さんは平成19年 (2007年) 4月20日の第61号で「久保愛三先生の最終講義について思う」も書いておられます。

第100号は平成20年 (2008年) 12月5日発行です。京機会元会長の永井将さん (S31) が創刊100号記念寄稿で「21世紀における人類技術史大転換を展望する」を書いておられます。次に駒井謙治郎さん (S38) が前号に引き続いて「鉄道模型の趣味」としてご自宅の「駒井鉄道」の紹介をされています。さらに京機九日会の案内と最後には「INFO」として色々な情報が掲載されています。この号ではレアメタルに関する多くの情報が紹介されています。

第200号は平成25年 (2013年) 2月5日発行です。吉田英生さん (S53) が「岩手、宮城、福島そして東京」と題して、東日本大震災の被災地の旅のことを書かれています。続いて成瀬淳さん (S43) が前号に引き続いて「啄木の教育論」で学生諸君へ伝えたいことを書いておられます。さらに矢野義昭さん (S47) の前々号から連載の「メガフロートを海洋大国日本の成長戦略の要に」が続いています。遠藤照男さん (S43) の「野次馬話」はこの号ではもう第64話になっています。その後に牧野俊郎さん (S47) の退官講義の案内と京機22年卒同窓会の報告が続いて最後の「INFO」では何と14ページにわたって平成25年度予算政府案や各省予算案のタイトルが掲載されています。

私は昭和44年 (1969年) に修士を修了して三菱重工業長崎造船所に就職後、長い間、関西を遠く離れていましたので、京機会とはほとんど縁がありませんでした。

私が京機会とかかわりを持つようになりましたのは本社に転勤して横浜に移ってからです。平成13年(2001年)の関東支部の立ち上げのお手伝いをしました。平成15年(2003年)に退職後、再び長崎に戻ったときに、「九州の会」ができていてその幹事を引き継ぎました。翌年の秋の「九州の会」のときに創刊間もない「京機短信」第3号にその案内を掲載して貰いました。その翌年には九州支部が発足しました。それから後は年2回春と秋に開催される九州支部行事の案内と報告を掲載して貰いました。

平成21年(2009年)に「エネルギーのはなし」を寄稿しました。これは平成20年(2008年)に「火力原子力発電」に掲載されたものですが、吉田英生さんに勧められて「京機短信」に転載して貰ったものです。その後も「地熱発電システム開発の歴史と現状」や「蒸気タービンの歴史」等を転載して貰いました。

「京機短信」300号の機会に、これまでの寄稿の実績を調査しました。卒業年次別の寄稿数をグラフにしたものを図1に示します。

1960年代(昭和40年前後)卒業者の寄稿数が多く、これに1970年代、1950年代が続きます。また、学生のKARTやSMILE活動が活発になってきた2000年代以降の卒業者の寄稿も低い山を作っています。この他にも世話人の久保さんはほぼ毎号の巻末にINFOとして関係情報を沢山掲載されています。KART関係の記事が109回、SMILEの記事が59回出ました。

記事の中にはシリーズで寄稿されたものが多く、遠藤照男さん(S43)の「野次馬話」は何と第100話まで続きました。主な連載記事を表1に示します。この他にも興味深い記事が沢山掲載されていて、京机会の会員は正に多士済々で、各種技術の専門家が多いのはもちろんのこと趣味の世界でも多彩だということがよく分かります。

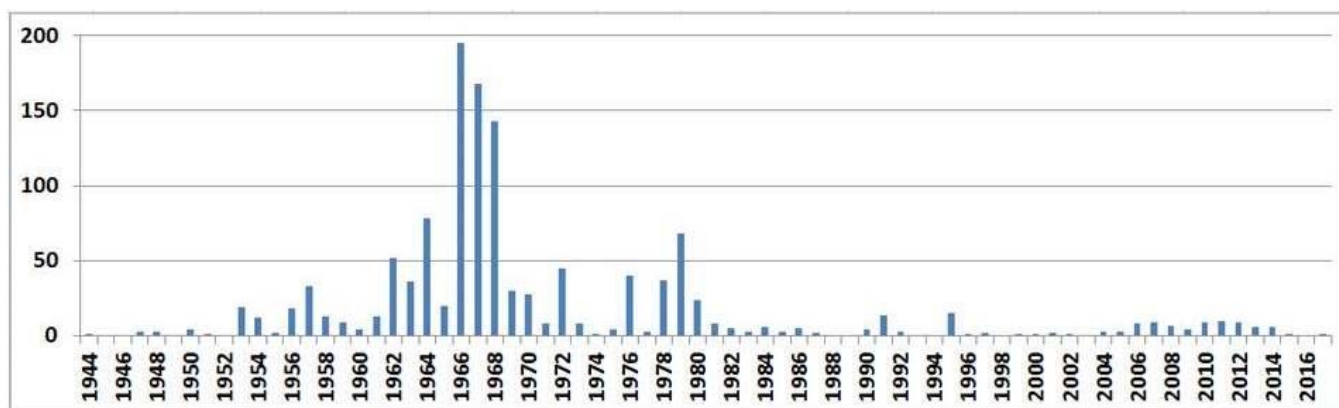


図1 「京機短信」卒業年次別の寄稿数

表1 「京機短信」 主な連載記事

卒年	西暦	氏名	タイトル、内容
S28	1953	羽田幹夫	米国国際原子力訓練学校への参加他エネルギー関連
S29	1954	大槻幸雄	開発技術者の心構え、 川崎重工におけるオートバイの開発と純国産ガスタービンの開発について
S31	1956	永井将	技術者の地位・処遇問題を考える、 21世紀における人類技術史大転換を展望する
		稲積充	素人の俳句独訳、ドイツの俳句事情
S32	1957	小浜弘幸	産業遺産探訪、文楽鑑賞会
S34	1959	中谷博	スパイラルエスカレーターの紹介、動く歩道と可変速高速動く歩道
S36	1961	天羽健三	映画に見る面白い機械
		井上恵太	二宮尊徳の現代的意義について、「地球温暖化」と自動車の将来
S37	1962	河田耕一	技術史としての鉄道、高校・中学・小学校の教育から「理系問題」を考える、 高知県教育委員会委員長を務めて
		中谷征司	宝石のはなし、白煙と悪臭のモスクワ旅行
		檜原勇多賀	日本酒よもやま話、世界の秘境巡り
S38	1963	駒井謙治郎	鉄道模型の趣味
		藤尾博重	朝永正三先生にとっての工部大学校と東京大学の合併と、その後
S39	1964	石田靖彦	今、技術を考える、エタノール燃料の問題点
		平忠明	シルクロードを旅して、ここまで来た！日本の燃料電池自動車
S40	1965	池内健	イギリスの空軍博物館訪問記
S41	1966	久保愛三	機械技術者の常識ってどこまで信用できるの？、ロシアは今
S42	1967	清野慧	打者の攻撃力を計測する
		藤川卓爾	エネルギーのはなし、地熱発電システム開発の歴史と現状、 アイスランドにおける自然エネルギー利用、蒸気タービンの歴史他
		間瀬俊明	5つの向かい風を超えて
S43	1968	岩名正文	品質管理 中国 15年、中国での品質管理15年 その後
		遠藤照男	野次馬話
		成瀬淳	ある技術者の生き方について、啄木の教育論
		羽山定治	「すばる」望遠鏡におけるトライボロジー
		芳村泰嗣	圧延設備のものづくり
S44	1969	江上秀男	写真同好会
		並木宏徳	オープンイノベーションの衝撃、産業遺産探訪
S45	1970	松久寛	暇人のつぶやき
S47	1972	岡本雅昭	京都・祇園ツアー
		矢野義昭	北朝鮮の「銀河3号」発射失敗と各国の対応、兵器の知能化・自律化が戦略に 及ぼす影響、メガフロートを海洋大国日本の成長戦略の要に
S51	1976	田中庸彦	昆明滞在記、済南滞在記
		西本明弘	設計プロセス設計のすすめ
		原口哲之理	自動車関連

S53	1978	西田信一郎	天文趣味のすすめ
		吉田英生	琵琶湖疏水と田辺朔郎、博物館めぐり
S54	1979	千々木亨	鉄都に生きた男たち
		富田直秀	人工関節用材料の改良技術
S55	1980	宇津野秀夫	企業の研究、大学の教育
		奥田寛	随筆
H3	1991	パク チョン キュウ	韓国社会の理解と大韓民国の使命
H7	1995	楠浦崇央	特許情報を用いた技術マーケティング
H20	2008	鯨岡絵里	京都大学フォーミュラプロジェクト

「京機短信」は300号で世話人が久保さんから吉田英生さんに交代しますが、これからも京機会の「メディア」として引き続きその役割を果たしていくことを期待してこの稿を終えます。

改めて久保さんに感謝します。「有難うございました。」

京機会と私

藤原健嗣（S44/1969卒 京機会前会長）

本号をもって京機短信も301号になります。久保さんの12年半にわたる御尽力のお陰で、なんとこの日を迎えることが出来ました。本当にありがとうございました。そして、それを吉田さんが引き継いでくれることになり、まさに「京機短信 forever！」と感激しております。

同窓会に限らず同好の士の集いは、しっかりとした幹事がいて初めて継続できるものだと思います。始める時こそ、仲間が集まって、おお！やろうとなるのですが、続けることこそ大変な力技です。私も会社の現役を退き、ゴルフ会やら高校、大学の同期会、会社時代に苦労を共にした仲間たちとの会、地域の人たちとの交流会等々、日々の生活充実を支えてくれる種々の会に参加していますが、こういった顔の見える仲間同士の会でさえ、しっかりした幹事がいて初めて継続できています。ましてや同窓会の様に人数が多く、世代も長きに亘るの会になればなる程、核となる人物がいて初めて姿、形が整い、会の個性を保ちながら、かつ人を呼び込み継続的に成長していくものと思いますし、こう考えるにつけ久保さんへの深い感謝とこれから吉田さんのお力に頼る心強さを感じている次第です。

私と京機会の関わりは、関東支部長を引き受けた平成25年からですが、それまではOB会としての存在は知っていましたが、あまり参加する機会もつくりないうまま食わず嫌いの状態でした。関東支部長から平成26年秋の総会で京機会会長に選ばれ、広く全国の京機会の行事に参加し、いろいろな世代の方と直接お会いして初めて京機会の一員としての実感が湧いてきたものです。そのような状態でしたから、会長なんか引き受けてやっていけるのかと自分の中でも曖昧な状態でしたが、京機短信をはじめ、京機会の中心人物として久保さんがおられ、久保さんは会田研の先輩でしたから本当に心強く、久保さんは大概各支部の行事にも参加されていましたので、ご一緒しながら何とか役目を果たすことができ、この意味でも深く感謝しています。

各支部行事や秋の総会でいろいろな方とお会いして、この京機会に集う人々の世代（学生、現役社会人、リタイアエイジの人）や職業観（産業界、学界、官界）の異なる各人が、それぞれの立場の違いを認識し、一緒に集うことの意義を認め合い、かつ別のジャンルの人との接点において自分とは違う何かを得ていくことで、自分の人生の糧にしていける、そんな創造的な場であることに気付くことができました。

このような気付きを与えてくれた人、この京機会の場を盛り上げてくれた人に、年間功労賞を差し上げることにし、支部毎にMVPを年間一人推薦してもらうことにしました。

皆さん大変喜んでくれ、各支部の方々もうまく盛り上げてくれています。今後もMVP受賞者たちが増え、京機会が大いに盛り上がってくれれば幸いです。

ところで、だいぶ以前のことですが、ソニーの社長、会長をされていた出井さんが「ONとOFF」という本を出されていたことがあります。私も毎日会社に行っている間は仕事が「ON」で、それ以外の時間は「OFF」でしたから、どうしても生活がON>OFFになりがちでした。しかし、いろいろな世代の方と話をしてみると、誰もが仕事の中だけで生きがいを持てるわけではなく、人生観の形成にはOFFのときを敢えてつくり、そこでの生き様を探すことも大切になってきます。つまり、OFFのときがあってはじめてONが生きてくるわけです。もっと言えば、充実したOFFの中にこそ、人の生き様が表れるものです。ずっとテンションを張りっぱなしにしておくと心も身体も脆化してしまいます。ONとOFFの繰り返しで身体の弾性を保つこと、そしてOFFの裏打ちにより地紙の厚さを増すことで、人としての厚みと判断

力を増すことができるのだと思います。ことに現役のときは趣味を持つことが必要で、趣味の効用は仕事で頭が煮詰まっている時でも、これをやれば必ず頭をリセットでき、ONの時間から離脱を意図的に行えることだと考えていました。

しかし、退任してONがガサッと少なくなってしまうと、いきなりOFFが主役に躍り出てきたりして、ちょっと今、その折り合いに戸惑っているのが現状です（笑）・・・。

京機会の場はONの場かOFFの場か？それぞれ人によって考え方が異なると思います。京機会が、最高齢97歳の方から学生会員まで、人脈づくり、遊び、社会貢献、生きがい？まで、それぞれ意義を見つけながら集える場であり続けるための短信の役割とはどうあるべきか、なんて難しく言わないで、言わば回覧板のようなものですよね。こんなニュースがあるよ、こんな意見があるよ、など自分なりの立ち位置を測るための大きな手立てです。

非日常の中で思わぬ拾い物をする、そんな得する場の連絡帳であって欲しいものです。

これからもよろしくお願いします。

久保愛三先生への感謝

松原 厚（S60/1985卒 京機会代表幹事）

まずは、京機会短信の提案・発足から300号までお世話いただいたことに、京機会代表幹事として、さらに前年度の機械システム学コース長として感謝の意を表します。情報伝達の手段が大衆伝達から個別伝達に移行することを先読みして短信を発足された慧眼ならびに実行力のおかげで、京機会と教室に大きな恩恵をもたらして頂きました。私たちは、この複雑な社会で、様々なコミュニティに属して活動をしています。コミュニティとは、つまるところは記憶のよりどころと思っております。朝起きて、自分を思い出し、自分のいる場所を思い出す。これを人間は毎日繰り返します。そのサイクルの中で、自分が所属しているコミュニティとの交信をする。同窓会組織としての京機会にとって大事なことは、忘れられないということです。年に1回の京機会ニュースではコスト的にこの機能を実装

するのは難しく、短信こそが定期的に「京機会の記憶」をよびさます役割をはたしてきました。しかし、この編集長は会員から見ても、たいへん難しい役割です。各人各様の筆使いがあるなか、その書きぶりも損なわず、筆にもっていかれることなくという役割、たとえるなら習字の文鎮、であるからです。今回、このお役を吉田先生が引き継がれることになり、短信が続くことをたいへんうれしく思います。久保先生には、「設計演習」等の産学連携教育の基礎をつくって頂いたことに、この場をお借りして感謝申し上げます。そして、今後も引き続き、短信への投稿者として、京機会員（われわれ）の記憶の蓄積にご協力頂けるようお願いいたします。

京機短信300号という時間

段 智子（事務局）

久保愛三先生が長年お世話くださっていた京機短信が先月300号を迎え、今号より短信の編集担当が吉田英生先生にバトンタッチされました。

久保先生には創刊（2004年10月5日）から12年半以上にも亘って毎月2回欠かさず原稿の編集を行っていただき、完成版を事務局までお送りいただいております。長きに亘るご編集本当にありがとうございました。

定年退職された2007年春以降、機械系専攻が桂キャンパスに移転する2013年春までの間は、今は懐かしい吉田キャンパスの京機会事務局にて短信編集を行ってくださっていたことも多く、作業の様子を拝見したり、また京機会のご相談をさせていただいたり、先生とお話しさせていただく機会も数多くございました。

短信発刊の年である2004年頃の京機会での出来事を思い返しますと…

遡りますこと1年前の2003年、久保先生は代表幹事でいらっしゃいました。

当時の総会は年2回で、春季大会を京都大学で実施し、秋季大会を企業にて持ち回り開催としていただくスタイルでした。春季大会では、「総会・講演会」と共に「学生と先輩との交流会」も、総会行事の一つとして物理系校舎で同時開催し、当日は200名を越える会員と学生が一同にご参加くださっておりました。

この年の夏、先生方の呼びかけに賛同した学生諸君による「京機学生会SMILE」

【創刊趣旨】

日本機械産業の発展の中心に京大機械系学科を存在させ、日本の豊かさと平安に貢献する義務が我々にはあります。大学企業双方において、誰が何をやっているかをお互いに知り、相互理解、研究・教育を活性化させ、その上に立って機械系教室OBと大学とが連携し相互の発展を目指す必要があります。産業界と大学機械系教室との共同戦線を構築して、双方の利益を図かるため、ここに「京機短信」を創刊し、出来るだけリアルタイムに近い状態の情報を e-mail 配信します。配布先は e-mail アドレスを登録している京機会会員、約 3000 名です。

京機短信 No1 : http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no1.pdf

また2004年は、京機会行事においても、従来大学開催であった春季大会が企業主催へと変わり、大学主催の大会は秋開催となりました。

その後、支部の活性化に伴い、2008年には企業にお世話になっていた春季大会の運営が、支部主催という新しいスタイルに変貌してまいりました。

支部主催の1回目大会は、関東支部により横浜で開催いただきました。その後、中部支部→中国四国支部→関西支部→九州支部→関東支部の順で、2014年4月に中部セントレア空港で実施いただいた中部支部主催の春季大会まで7回にも亘り、関係者の多大なるご協力により各支部域でさまざまな趣向を凝らした豪華な大会を毎年開催いただきました。



支部主催 春季大会・総会（2008年～2014年）

2010年 中国四国支部（岡山） / 2011年 関西支部（大阪） / 2012年 九州支部（長崎）
2013年 関東支部（東京） / 2014年 中部支部（名古屋）＜同時開催＞ こども科学教室

2013年4月には、長年親しんだ吉田キャンパスから桂の新キャンパス移転という大変大きな出来事もありました。

この機会に京機事務局も桂に移局することとなりました。ご卒業生の皆様がお訪ねくださるに相応しい雰囲気であるようにとの先生方のご配慮により、桂キャンパス校舎の中でも眺めのよい立派な事務局をご用意くださっております。

(ありがとうございます！)

この年の秋季大会は、桂キャンパスに於いてC3棟施設見学会や船井哲良記念講堂での懇親会など盛大に開催させていただきました。



桂キャンパス移転記念式典 (2013年5月11日)



2013年秋季大会・総会 (2013年11月23日)



そして2014年の秋季大会からは、会員そしてご家族とご一緒に京都大学のキャンパスにて終日楽しんでいただける内容にと転換を図り、京都大学主催のホームカミングデーと同日に吉田キャンパスにて11月第一土曜日に開催する形にかわってまいりました。

なお、今年の京機秋季大会・総会は、11月3日(祝・金)に、京都大学ホームカミングデーとあわせて開催予定です。関係者一同、皆様のご参加をお待ち申し上げます。



京都大学ホームカミングデー・京機秋季大会・総会
池坊専好氏と山極壽一総長 (2016年11月5日) / 秋季大会・総会参加者集合写真 (2015年11月7日)

以上、京機短信の300号発行に因み、久保先生への御礼と重ねまして、京機短信

掲載開始の2004年頃から現在に至るまでの出来事や京機会総会・交流会などの変遷（思い出）など簡単ではございますが、ご紹介させていただきました。

昨今の京機会は、秋の総会や学生と先輩との交流会だけでなく、支部総会をはじめとする支部行事も大変盛んで、本当にたくさんの行事を開催いただいております。事務局も微力ながらに各種行事のお手伝いをさせていただくことがございますが、幹事そして関係者のお心遣いのご尽力を目の当たりにさせていただくことばかりです。またご参加いただく会員の皆様からも事務に対して温かいお言葉をいただくことも多く、いつも大変有難く感じております。この機会にこの場をお借りしまして御礼申し上げます。

最後に・・・

会員各位からの短信原稿やご意見は基本的に事務局にて拝受させていただいておりますが、併せて「久保先生、いつも愛読しております/ありがとうございます/ご苦労様です」とのお声も沢山頂戴し、年を重ねるたびに数も大変多くなってきておりました。また、久保先生の「原稿不足です」とのコメントに反応して、すぐに皆様からのご寄稿が届くことも多くございました。この12年半以上もの間、事務局として、いつも欠かさずご編集くださっていた久保先生のご尽力と、そして会員の皆様の短信（久保先生）への応援を一番近くで感じさせていただいております。

僭越ではございますが、300号という長きに亘っての編集を終えられました久保先生にお礼申し上げますと共に、間近でいろいろと勉強させていただくことができました旨、感謝の気持ちでいっぱいでございます。ありがとうございました。

今号（301号）からは、吉田先生にお世話になっております。事務局としまして、今度は会員の皆様と吉田先生と繋ぐ役割としてこれからも精進できればと考えております。これからも皆様のご投稿も楽しみにしております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

編集後記：新編集者からのご挨拶

—ティッセン＝ボルネミッサ美術館（マドリッド）に久保愛三さん！？

吉田英生（S53/1978卒）

前編集者の久保愛三さんの偉業には、ただただ頭が下がります。2004年10月5日の創刊以来、コンスタントに月2回（厳密に申しますと、欠号となったのは2005年2月下旬号と2015年10月上旬号の2号のみ）で足かけ14年で300（=6+23+24×9+23+24+8）号を達成されました。しかも量的のみならず、毎号、質的にもたいへん素晴らしい記事群の編集でした。

非力な小生が、久保さんのような大編集者の後を継ぐのはたいへん恐れ多いですが、京機会の皆様には引き続きよろしくお願い申し上げます。なお、月2回の発行は小生には絶対無理と観念しましたので、月1回（5日）の発行とさせていただきます。また、編集者が替わった機会に、ヘッダ一部のデザインは概ねそのままですが配色を紺 —— カラーコード(R, G, B) = (0, 0, 66)あるいは(C, M, Y, K) = (94, 100, 38, 45) —— を基調とさせていただきました。

ところで、昨年マドリードのティッセン=ボルネミッサ美術館（El Museo de arte Thyssen-Bornemisza）<http://www.museothyssen.org/en/thyssen/home>を訪れたとき、思わず久保さん！と見間違えた絵をご紹介します。



585
El lector
The Reader

c.1885

Óleo sobre lienzo

HODLER, Ferdinand
Berna, 1853 - Ginebra 1918

京機短信の記事が不足し、紙面が埋まらないときなど、久保さんはこのような姿で頭をかかえておられたのではないかと想像した次第です。

なお、これまでの300号の貴重な情報に迅速にアクセスできるよう総目次を作成中です。